

コロナ後のルネッサンス

園長 児嶋 草次郎

午後の梅雨空のもと、咲き乱れる道路添いのカンナをながめながら、私は高鍋町美術館へ出かけに行きました。久しぶりにワクワクするような高揚した気分でした。6月26日(土)、午後2時より、彫刻家の田中等君と歌人の伊藤一彦先生との「MOON DROPS 月の雫」出版記念公開対談が行われたのです。

中国、マレーシア、アメリカ、ロシア、フランス、チェコ、トルコ等世界各地に彫刻を作り続けている田中君の作品49点に、伊藤先生が自由にインスピレーションを働かせながら一首ずつ短歌を添えるという画期的なコラボレーションを実現されたのです。そのお二人の共演を納めたのが「MOON DROPS 月の雫」であり、私も昨年の11月に一冊寄贈でいただき、感激しながら1ページ1ページじっくり味わうことができました。

今回の対談は、そのコラボも含めて伊藤先生と田中君が語り合うものでしたが、その第二部として、田中君と高鍋高校で同級生であった、安井雄一郎君、柳英明君、それに私の三人が、伊藤先生と田中君の思い出を語るということになり登壇しました。伊藤先生は、私たちが2年生の時の「倫理社会」の先生でした。司会者は、1部2部とも高鍋町長黒木敏之氏が務められました。

この本を出すきっかけになったのが、41年前の伊藤先生から田中君への励ましの手紙だそうです。先生の思いやりに感謝しながらも、まだ青春の彷徨(ほうこう)から脱しきれておらず返事を出すのを逸してしまい、41年という年月が過ぎてしまいます。そして今回、先生とのコラボの本を出すことでその返事とした、ということなのだそうです。「ようやく私からの返歌への宿題が叶うことになった。」と、田中君は本のはじめに書いておられます。

黒木町長も、人生重ねて成熟していくのにこれだけの時間が必要だったのだろう。お二人の深いつながりに感動するとおっしゃっていました。田中君と伊藤先生の発言から印象的な言葉をここに記しておきます。会場には、コロナ禍で制限され、100人ほどのお客さんでしたが、充実した一時になったのではないかと思います。

伊藤先生「偶然の出会いは、それぞれが持っている志が触れ合うことで、必然に変わっていく。」

田中君「彫刻は五感の芸術。親しみ方が日本と海外とでは違う。海外の人は日常的に触れて楽しむ。」

さて、今回は田中君、伊藤先生との出会いを語るために、準備していた原稿をここに紹介させていただきます。会場では全部話せませんでした。芸術と福祉との融合をめざす一人として、今回のイベントは、私に与えられた一つのチャンスでもありました。石井記念友愛社の理念とも協調し合える部分もあり、単なる一つのイベントとして終わらせてはならないとも感じます。

私と田中等君とは、高鍋高校3年間同級生でした。私は木城町の山の中で、土と草と木しかない開拓地茶臼原から高鍋に出て来ましたので、ほんとの田舎人として、高鍋の町の中で生まれ育った

田中君は、精神年齢もはるか上だし、私には、彼はまばゆい都会人に見えました。高校に入学して部活動は彼と同じ美術部に入ったのですが、最初にデッサンをしると先輩に言われても、デッサンなんてそれまでやったこともなく、鉛筆で殴り書きをして注意され、恥ずかしい思いをしたのを覚えています。その時の田中君のデッサンは、私から見てもう完成していました。美術部顧問は、かの有名な野球部監督の平原先生でした。近づくのも恐いような先生で、結局、対面で直接御指導いただいたことはなかったような気がします。野球部が一番強かった時期でしたので、先生が美術部部室に指導に来られることもほとんどなかったと思います。

私は絵を描くことは好きだったのですが、そういうことで興味も薄れていき、美術部も中退してしまいました。そして絵描きになりたいという青春の夢ははかなくも消えていきました。美術部で一緒だったということもありますが、田中君との3年間、友人関係にあったと思います。私は高校卒業後福祉系の大学へ行き福祉の道に進みましたが、その後も田中君とは交流は続けて来ました。田中君は芸術の道をひたすら究めていきました。その彼にたまに会うことで、芸術に挫折した私は癒されました。

彼の彫刻作品が優しくなったのは、友愛社の森で作品を作るようになってからだとは私を感じています。例えば県立図書館西側の総合文化公園内に立つ石井十次像のように、具象はそれまでもすばらしいものを作っておられましたが、抽象彫刻に関しては、私に言わせれば、訳のわからないようなものでした。それが友愛社のアンジェラスの森の中で作られるようになって、作風がまるくこくなり生命感を感じさせられるようになりました。田中君の中に今まで眠っていた何かが、この石井十次の森の中で目覚めたのではないかと私なりに分析しています。もしかしたら、石井十次の魂の一部が乗り移ったのかもしれませんが。芸術家には我々凡人とは違った靈感みたいなものがあります。この本「月の雫」の中に出てくる作品の群は、ほぼその範ちゅうに入るものです。

偉そうに言って申し訳ないのですが、人間の一番原初的欲求、母性を求める本能みたいなものがこの作品制作のエネルギーになっているような感じがします。

本を送ってくださった御2人にすぐ礼状をだしましたが、伊藤先生への手紙には次のように書きました。

「田中君のこれらのシリーズの作品には、母性というのか、生命の根源を感じます。田中君にとっては、月は母性の象徴なのかもしれません。じっと見つめていると、母親の胎内に戻っていくような安心感みたいなものを感じます。」

先ほども書きましたように、田中君は、中国、マレーシア、アメリカ、ロシア、フランス、チェコ、トルコなど世界各地で作品を作って来られています。世界各地にこのシリーズの作品があるということは、その国々の歴史や文化を越えて、共通に人々の心（魂）を引きつける魅力がこれらの作品にあるからです。その作品の中に眠るのが昇華された「母性」であり、それに人々は引き寄せられるのだと、私なりに分析しているのです。

これら田中君の感性は、高鍋町の歴史と文化によって培われたものだろうと私は思います。才能だけで作品が生まれるものではないと思うのです。これはずっと古い記憶になります。小学校下級生の頃、1年に1度か2度か、当時の国鉄バスにゆられて母と一緒に高鍋の町に出ることがありました。私にとっては高鍋の町は、遠い遠い大都会でした。一番街など何もかにもかが輝いていました。今宮崎銀行の駐車場あたりに田中君の実家の石屋さんがあったと思います。一番の中心地です。私と同じくらいの少年が家の前をチョロチョロしていたのを覚えています。あの少年が田中君だったのだろうと思います。

高鍋の重厚な文化の中で生れ育った田中君ですから、私とは人格の基盤が全然違います。私はそれを「明倫文化」と呼びたいと思いますが、その「明倫文化」に通じるこれらの作品群であると私は感じているのです。「明倫文化」とは何かは後で説明したいと思います。

伊藤一彦先生は、高鍋高校生の時の「倫理社会」の先生でした。早稲田大学を卒業されたばかりで、新任の先生として赴任して来られました。洗練された爽快な笑顔が印象的な先生でした。早稲田で哲学を学ばれたということでしたが、豊富な知識をひけらかすというような所は全くなく、すごく誠実で真面目で、ストイックな雰囲気を感じました。後にカウンセラーもされていますが、今思えばあのあたたかな眼差しはカウンセラーの眼差しだったわけです。

高鍋町の豊穡な文化土壌の中で育った田中君は、伊藤先生の授業にも反応していたようです。土や草や木以外何もない開拓地域の茶臼原で育った私は、何事もボーと見て感じるのが好きな少年でして、論理的思考はあまり得意ではありませんでした。ですから、授業もボーと聞き流しながら別のことを夢想していたような感じがします。田舎人としての劣等感もあり、都会的雰囲気の伊藤先生を警戒して、近づこうともしませんでした。

今回なぜ田中君の彫刻と伊藤先生の歌とのコラボが成功したのか。師弟関係だけではこうはならないと思います。伊藤先生は、今や、日本を代表する歌人です。伊藤先生が田中君の作品群に芸術としての価値を認められない限り一緒に仕事をされようとはしないでしょう。今回コラボが成功したのは、伊藤先生が田中君の作品を一定レベル以上のもの、本物の芸術作品として認められたのだということだと思います。そこが私としてはうれしいことです。そしてさらにうれしいことは、伊藤先生の感性と田中君の生命の根源、それは母性を求めるような感性とが共鳴し合ったということです。私は福祉の世界の人間ですが、この共鳴の世界は、まさに福祉と芸術との触合に近い世界だと勝手に感じています。共鳴が実現したのは、伊藤先生が4年間、高鍋に住まわれたこととも大いに関係しているのではないのでしょうか。

最後に皆様に一つの提案をさせていただきます。「田中等彫刻公園」を高鍋町内に作りませんか。世界20か国に田中君の作品があるということです。それぞれの国の人々が見て触れて癒されている。想像するだけでも楽しくなります。「癒す」という言葉、広辞苑で引くと、「病気や傷をなおす、飢えや心の悩みなどを解消する。」と説明してあります。

ここから話が飛びます。来年は「明倫堂」閉校150年という年です。閉校は明治5年でした。名君秋月種茂が理想国を作るために創設した(1778年)藩校ですが、95年続いて、明治維新により閉校となりました。石井十次も一番末期2年弱学んでいます。種茂はそれ以外にも色々善政をやっており、その一つが「高鍋藩士規」の公布です。高鍋論語と呼んだりもしていたようです。言わば高鍋藩士たちの生活心得みたいなものです。11条ほどあるのですが、注目すべきは第4条です。

「親類貴賤に拘わらず、その続きを考へ、夫々手厚く相交わり、兼ねて寄合の村中、何事も申し合わせ、睦まじく交わるべし。病氣並びに災難これある節は、力の及び、互いに相救ひ、且つ召使の者に至るまで、隣愍を加ふべき事。」

簡単に言うと、身分を問わず「相交わり」、病氣や災難の時は「互いに相救い」し合おうと呼びかけているのです。「隣愍を加ふ」とは情けをかけるということです。

この呼びかけに100年後に一番大きく反応したのが石井十次ということにもなります。上の言葉を石井十次の言葉に置き変えると、以下ようになります。

「天は父なり 人は同胞なれば 互いに相信じ 相愛すべきこと」

秋月種茂の願いは、100年の年月の間に、高鍋の精神文化として根付いていったと思われま

す。その文化を私は「明倫文化」と呼びたいのです。 明倫堂閉校から 150 年が経過して、この田中君と伊藤先生との合作は、その文化土壌の中から新たな「明倫文化」が一つ花開いた（再生）とすることもできるのではないかと。

14 世紀頃全ヨーロッパを襲ったペスト病の後、ルネッサンスが興ったと言われていいます。今世界中はコロナ禍の中にありますが、コロナ後、新しいルネッサンスが始まる可能性があります。伊藤先生の言葉をお借りするならば、「未来への希望と勇気」を与えてくれる「生命感のある」田中君の作品は、そのルネッサンスの先駆けとなるものだと思うのです。

高鍋には高鍋大師という石像群がありますが、彫刻公園が実現すれば、それとはまた違った心や魂を癒す神霊スポットができます。世界 20 か国の人々が聖地めぐりということで訪れるようになるかもしれません。ぜひ、高鍋町長さん主導で進めていただければありがたいです。私たちも伊藤先生と田中君の作品に呼応していきたいと思えます。